

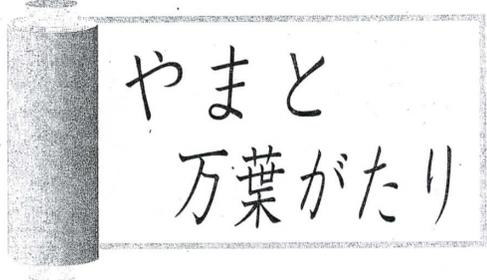
吉隠の猪養の山に伏す鹿の

婦呼ぶ声を聞くが羨しさ

大伴坂上郎女(巻八・二五六一)

この歌は、題詞によ
ると、大伴坂上郎女が
跡見の田庄にいた時
に作った歌です。跡見
の田庄とは、現在の桜
井市外山付近にあった
とみられる大伴氏の田
地経営施設で、跡見
庄とも呼ばれました。
大伴氏の田庄は、跡見
の他に竹田(現在の橿
原市東竹田町付近)に
もあり、いずれも飛鳥

・藤原旧京の近郊に立
地します。これらは、
坂上郎女の父である大
伴安麻呂が壬申の乱の
勲功などにより賜った
所領と考えられ、安麻
呂の妻である石川郎
女が大刀自(家政をつ
かさざる女性)として
その経営に携わり、後
には安麻呂と石川郎
女の子である大伴稻公
や坂上郎女らが田庄



の経営を引き継ぎまし
た。坂上郎女の自宅
は平城京北郊の坂上
里にありましたが、秋
の収穫期には数カ月
にわたって跡見や竹田
の田庄に滞在していま
した。

歌の内容は、跡見の
東の山から聞こえてき
た雄鹿が雌鹿を呼ぶ鳴
き声に、奈良の自宅を
遠く離れて田庄に滞在

【訳】吉隠の猪養の山に伏している鹿が
妻を呼ぶ声を聞くのは心ひかれることだ。

している自らの孤独を
重ねたものです。鹿の
鳴き声が聞こえたとい
う吉隠(現在の桜井市
吉隠付近)は、初瀬川
の支流である吉隠川の
源流一帯に当たり、跡
見からは東へ約7キロ離
れています。吉隠の地
は、大和盆地から東へ
長く延びる初瀬の谷の
行き止まりに当たりま
す。また、『万葉集』
巻二には、恋人の但馬
皇女に先立たれた穂積
皇子が皇女の葬られた
吉隠の猪養の岡に思い
をほせた歌(二〇三)
が見られます。吉隠の地
が見え、志貴皇子の妻
である紀椽姫の墓も吉
隠にあるなど、皇族や
貴族の葬地でもありま
した。こうしたことが
ら、山に隠れた寂しい
土地という吉隠の印象
が生じたとみられま
す。山中から声を響か
せた鹿の姿は跡見庄か
らは見えなかったはず
ですが、寂寥感を呼
び起こす吉隠の地が寂
しげな鳴き声を発する
鹿のすみかにふさわし
いと坂上郎女は考えた
のでしょう。
(県立万葉文化館主任
研究員・竹内亮)

暮よひに逢あひて 朝あした面おも無なみ

隱なほり野のの 萩はぎは散ちりにき

黄も葉み早ち続はやげ

縁えん達だち師ほふし(巻八・一五三六)

街路樹の葉も散る時期になり、秋の深まりを感じます。今回の歌は季節ごとに分類されている『万葉集』巻八の「秋の雑歌」に収められている一首です。作者の縁達師について伝わっているのは作者名とこの歌だけです。作者名の「縁」が百済系の姓であるとする説や、「縁達」が僧名で

「師」は法師であるという説などがありま
す。さて、1句目、2句目の夕方に男性の訪れがあった女性が朝に恥じらって顔を隠すという部分は、「地名名張」を導く序になっていま
す。名張は三重県の地名で、隠れる意の「なばる」と発音が類似することから連想された

やまと
万葉がたり

序です。他に「沖つ藻の」という枕詞もあり、同様に海中の藻は見えないことから「隠」を導きます。今回の歌の出だしは「沖つ藻の」よりロマンチックですね。

この表現には前例があり、天武天皇の子・長皇子が702年に詠んだ「暮に逢ひて朝面無み隠にか日長き

妹が慮せりけむ(巻一・六〇)を参考にし、たど考えられます。長皇子は名張で仮宿りをしていた女性を詠みましたが、今回の歌では秋と黄葉が詠まれています。なお、『万葉集』では多く

【訳】宵に男と逢って朝は恥かしさに顔を伏せる——。隱野の萩は散ってしまつた。黄葉よすぐ続け。

ました。140首以上に詠まれ、秋の景物の代表といえます。ついで黄葉が多く、80首ほどあります。春の花と対になるのが秋の黄葉です。愛でるべき萩は散ってしまった、早く黄葉が続いてほしい、という歌はちょうど今ごろの時期にあたります。本格的な紅葉が楽しめるね。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)